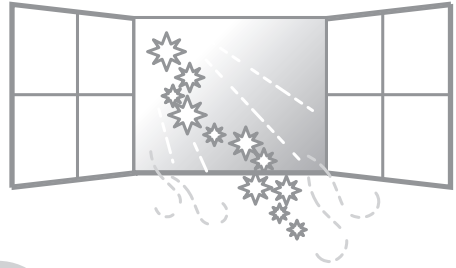


平成19年度全国中学生人権作文コンテスト京都大会  
京都地方法務局長賞受賞作品

# 人権の窓<sup>7</sup>

## いのち 生命の詩

人権の窓を開けて、優しい陽の光と、さわやかな風を感じてください



### 生命の詩

南丹市立八木中学校一年 中村 康太郎

平成十九年度全国中学生人権作文コンテスト京都大会で市立八木中学校一年生の中村康太郎さんが見事京都地方法務局長賞に輝きました。同コンテストには府内の中学校から七十一校七千二十一作品の応募があり、中村さんの作品「生命の詩」など十三点が優秀作品に選ばれました。

あなたは、目の見えない子どもがどうやって生活しているか考えたことがあるだろうか。これまで僕は、目の見えにくいと思っていた。そんな僕は、先日新潟で行われた「生命の詩の集い」の受賞式に行く機会があった。盲学校勤務の母が担任した小学二年生の田村美咲さんが詩作で最優秀賞に選ばれ、僕がカメラ係で同行することになったからだ。伊丹空港で初めて美咲さんに出会った時の印象は、とても明るくはきはきして人なつこい女の子であった。

僕が美咲さんの手をつないで一緒に歩くと、耳や鼻や肌や全身で周りの様子をキャッチしているのに驚いてしまった。「太陽がこっちだから西だね」と、左手で指さしたり、何の音がしたのか、何のにおいなのかなど次々に聞いてきたりした。また、においや足音でだれが近付いたか分かり、飛行機の発着時刻や、地名やものの名前を覚える記憶のよさにも驚いた。

美咲さんは、「おーい！たいていよーくーん」という題で、外で遊ぶ時、横断歩道を渡る時、いつも照らしてくれる大好きな太陽を作品にしているのだ。僕は、夕食の時、わりばし

た。そして、学校の授業で自分の顔、お尻、左右の腕を使って東西南北を覚えたことを発表していた。本番前の美咲さんは少し緊張していたものの大勢に聞いてもらうことが嬉しそうであった。案の定、美咲さんは、会場の皆の心に真っ直ぐ届く声でメロディーや振りを交え全身で堂々と自分の詩を表現し、観客を圧倒し、会場からの大きな拍手に包まれた。僕は、シャッターチャンスをとがすまいと必死だったが、同時にとても感動して胸が熱くなっていた。後日、美咲さんは、地元の新聞や見附市広報で写真入りで紹介されていた。

僕にとつて美咲さんと過ごした二日間は、大変貴重な時間であった。なぜならこんなにも無心に一生懸命生きていく人に出会ったことがなかったからだ。美咲さんは、小さいけれどとても偉大に感じた。点字を触って読む手が目である。その大切な手でボタンかけ、菌みがき、衣服の着脱等一つ一つ僕らにしたら何でもないことを日々努力しているのだ。

僕は、くよくよしたり、イライラしたりすることがあり、まだまだ人間ができていないなあと思う。美咲さんを見てみると、努力して頑張ったらできないことはないような気がさえてくる。人のせいにして甘えている自分を恥ずかしく思う。僕は前を見つめて希望を持ち続け輝ける自分でありたいと思う。